

平成31年6月2日
木村高久

開国と横浜開港の真の功労者は誰か

「開国と横浜開港の真の功労者」についてはいくつかの説がある。そこで本年が横浜開港160周年という節目にあたるので、改めて真の功労者について考察することとする。

1 横浜市内には開国と横浜開港に貢献したと思われる3人の銅像、石碑がある。一つは横浜市立掃部山公園の井伊直弼なおすけの銅像。次に横浜市立野毛山公園内にある佐久間象山の石碑である。そして旧東海道神奈川宿にある本覚寺の山門前に民間団体が建立した岩瀬忠震ただなりの石碑となる。

(1) 井伊直弼なおすけの銅像

明治17年(1884)2月、戸部の丘(鷹ノ巣山・不動山⇒鉄道山)を旧彦根藩士等が買収し井伊家に寄贈。「掃部山」と称する。明治42年(1909)7月には横浜開港50周年記念として井伊直弼の銅像が建立される。

また、大正3年(1914)に掃部山は横浜市に寄付されて「掃部山公園」として開園された。なお当初の銅像は戦時中に金属回収で撤去となり、現在のものは昭和29年に製作されたものである。銅像の傍らに平成元年6月2日付、当時の市長細郷道一さいごうみちかずにより書かれた石碑がある。

(2) 佐久間象山しょうざんの石碑

昭和29年(1954)10月1日、横浜開港100周年を記念して野毛山公園内に佐久間象山顕彰会が「横浜開港の推挙者佐久間象山の碑」を建立する。

横浜が開港されたのは佐久間象山の主張のお陰であるとして、当時の横浜市会兵頭政志議員からの発案による。なお碑文は当時の市長平沼亮三の揮毫によるものである。

(3) 岩瀬忠震ただなりの石碑

昭和57年11月、本覚時山門前に横浜郷土研究会により岩瀬忠震の顕彰碑が建てられた。なお、本覚寺は幕末米国初代領事館が置かれた場所である。碑文は当時の横浜市長細郷道一の書による。

以上、3人の銅像・石碑の設置場所や規模などから推察すると、横浜市は開国・開港の功労者を井伊が1位、佐久間が2位と考えていると言える。

1-2 「開港功労者顕彰」

横浜市は昭和33年6月、横浜開港100年記念事業の1つとして「開港功労者顕彰」を実施し31名の方々が選ばれた。これらの中でテーマに該当すると思われるのが「堀田正睦まさよし（間接）、佐久間象山、井伊直弼、岩瀬忠震ただなり（間接）、T・ハリスとM・ペリー」の6名である。その他は吉田勘兵衛（間接）、原善三郎、茂木惣兵衛、高島嘉右衛門、ヘボン、パーマなどで、開港そのものの功労者ではなく主に開港後に各方面で横浜に貢献した人々である。

*間接とは、開港に直接的に貢献したのではなく間接的に貢献した者である。

2 開国と鎖国

(1) 「開国」の前提として「鎖国」がある。しかし、「鎖国」という用語は20年程前から適切でないとい指摘する見解もある。

「鎖国」という語は、1801年（享和元年）に長崎のオランダ通詞志筑忠雄しづきが外国書を翻訳する際の造語であり、江戸幕府が使用したものではない。

(2) 幕府の鎖国政策

1616年（元和元）外国船（明の船を除く）の入港は平戸港と長崎港に限定する。

1633年（寛永10）第1次鎖国令（奉書船『老中発行の奉書（許可書）』を携行する船）以外の海外渡航を禁止

1634年（寛永11）第2次鎖国令（日本人の海外往来と通商の制限）

1635年（寛永12）第3次鎖国令（日本人の海外渡航禁止、帰国の全面禁止）

1636年（寛永13）第4次鎖国令（貿易に関わらないポルトガル人の追放）

1639年（寛永16）第5次鎖国令（ポルトガル船の来航禁止）

1641年（寛永18）オランダ人を長崎の出島に移す。

鎖国令と呼ばれてきたものの多くは、幕府老中が長崎奉行所に出した指示・通達に過ぎない。最後の第5次鎖国令だけが法令のかたちで西国に出された。

（3）さて、鎖国とは外国との通商・交易を全面的に禁止することである。ところが、当時の幕府は「4つの口」で交易を行っていた。

- ア 長崎口 — 幕府直轄のもと、オランダや中国との貿易がなされていた。
- イ 対馬口 — 対馬藩を通して朝鮮と国交・貿易が行われていた。
- ウ 薩摩口 — 薩摩藩を媒介に琉球王国、さらにその背後の中国・東南アジア諸国との交易が行われた。
- エ 松前口 — 蝦夷地の松前藩を通しアイヌと北方貿易を行った。

「鎖国」と言う言葉が適切でなければ、「開国」も変えなければならない。

以上、鎖国、開国は適切な言葉ではないと考えられるが、現時点で適切な言葉がない。よって今回は従来通りの鎖国・開国を使用する。

3 開国・横浜開港関係者の概要

（1）佐久間象山^{しやうざん}

佐久間象山は1811年（文化8）に信濃国松代藩の家臣佐久間国善^{くによし}の子として誕生。幼い頃から漢学を学び、天才と呼ばれた。1841年（天保12）主君真田幸貫^{ゆきつら}が老中になると、アヘン戦争が日本にも起こることを想定し、象山に兵学を修めること及びその上で防衛策を提案するよう命じた。象山は可能な限り和漢洋の兵学書を学び、その成果として1842年（天保13）11月に「海防八策」を建言した。①諸国の海岸で要害の地に砲台を築き大砲を常備する。②西洋式の軍艦を造り、海軍の戦法を習練させる。③人材登用の法を整備する等。

この「海防八策」を幸貫は幕閣内の審議に図るも、天保の改革中で多忙の為、相手にされなかった。1844年（弘化元）幸貫が老中を辞職したため「海防八策」は実行されず。象山は学識・努力は評価されるが、性格は自信過剰、尊大、傲岸と言われる。義弟の勝海舟も「氷川清話」の中で「象山は物知りで、学問も

あるし見識もあるが、ほら吹きで困る」と書かれている。

次に象山は西洋砲術家であり伊豆韮山の代官である江川英龍ひでたつに弟子入りする。しかし、わずか40日ほどで辞めることとなる。免許は授与されたが。

1851年（嘉永4）江戸木挽町こびきちょう松代藩邸で私塾を開く。門下生に勝海舟・吉田松陰・河合継之助つぎのすけ・坂本竜馬・橋本左内など。

1852年（嘉永5）藩主幸貫は亡くなり孫の幸教ゆきのりが藩主となる。

1853年（嘉永6）ペリー来航。松代藩軍議役（参謀）となる。「急務十条」を阿部老中首座に提案。海軍の創設を主張。この思想が勝海舟へ受け継がれたと思われる。1854年（嘉永7）にペリーが再来し横浜応接所にて交渉時、警備していたのが松代藩（長野市）と小倉藩（北九州市）で、象山は松代藩軍議役として参加した。

（象山の横浜開港説）

① 下田反対の理由＝下田は天然の要害であり外国人に占領されたら奪還が難しい。（本音＝下田の代官である江川英龍に外国の知識や技術が独占されるのを妨害する。）

② 横浜開港の理由＝横浜が江戸から離れ防衛上守り易い。また東海道神奈川宿と離れていてトラブルを少なくすることができる。

（本音＝自分の属する松代藩が横浜を警備しているので、情報・技術が自分にもたらされる。）

☆ 日米和親条約第2条で下田と函館が食料・薪水等の供給場所となる。

1864（元治元）7月、京都三条木屋町で攘夷派に刺殺された。その時、洋装で洋式の鞍を付け白馬にまたが跨っていた。

（2）井伊直弼なおすけ

1815年（文化12）第11代彦根藩主井伊直中なおなかの十四男として誕生。名は鉄之助（のちに鉄三郎）。1831年（天保2）、直弼17歳の時、父逝去。長兄直亮なおあきが12代藩主となる。直弼は弟直恭なおやすと共に藩の公館「北屋敷」に移り、生活費は三百俵の捨扶持を与えられるだけであった。直弼はこの住まいを「埋木舎うもれぎのや」と号した。この様に将来に希望がない生活は、一般的に向上心や意欲を削ぎ怠惰

な日常を送ることとなる。ところが直弼は国学、和歌、茶道、数学、天文学などを学ぶと共に剣術、馬術、柔術などに勤しんだ。1834年（天保5）、弟と共に江戸で養子の面接を受ける。弟は決まるが直弼はまともらなかった。1842年（天保13）国学者の長野主膳と知り合い「我が師」と仰ぐ。のちに直弼が藩主となると主膳を家臣に取り立て、以後大老の腹心となる。

1850年（嘉永3）藩主直亮（兄）^{なおあき}死去により、直弼が第13代藩主（36歳）となり掃部頭と称する。立派な藩政を行ったという。

（3）岩瀬忠震^{ただなり}

1818年（文政元）11月21日、直参旗本設楽直之助（小普請組1400石）^{したら}の三男として誕生。母は林大学頭^{じゅつさい}述斎の側室。（大学頭とは幕府の学問の責任者）忠震が26歳の時に直参旗本岩瀬市兵衛の長女と結婚し、岩瀬の姓を名乗る。忠震は幼い頃から英才の誉れが高かった。1851年（嘉永4）33歳のとき江戸昌平坂学問所の教授に任命される。老中阿部正弘に能力を買われ、目付に任命されペリー来航時の交渉などを担当する。1854年（嘉永7）日米修好通商条約に関しては下田奉行井上清直と共にハリスと交渉し調印するなど外交面で活躍する。積極的開国論者であった。のちに將軍継嗣問題では一橋派であったため、井伊直弼による安政大獄により左遷、蟄居を命じられる。44歳で逝去。

（4）堀田正睦^{まさよし}

1825年（文政8）下総佐倉藩十一万石の藩主となる。^{しもうさ}

1841年（天保12）老中となるが老中首座水野忠邦とそりが合わず1843年（天保14）老中を罷免される。1855年（安政2年）老中再任。老中首座になる。1856年（天保）10月17日、老中阿部正弘が外国事務取扱兼帯に任命。

正睦は見かけ上、肥満体で、訥弁^{とつべん}であるが決して愚者ではない。正睦はペリー来航時から開国貿易論を主張していた。また、蘭癖（外国好き）と言われる。

(5) 阿部正弘

1819年（文政2）10月16日、父老中阿部正精^{まさきよ}、母、側室高野具美子^{くみこ}の6子として江戸西の丸に誕生。1836年（天保7）正寧^{まさやす}（正精の3男）の養嗣となる。同年12月25日、備後福山十萬石第7代藩主（18歳）となる。1843年（天保14）老中となる。1845年（弘化2）老中首座を命じられる。

阿部は① 大船建造禁止の解除 ② 欧米列強と和親条約を結ぶ ③ 1856年（安政3）に和親条約締結国との通商貿易開始を主張 ④ 海外留学生派遣を唱える。⑤ 海防掛体制を設けると共に、優秀な人材の登用などの功績あり。

ただ、阿部は性格が慎重であり左右に配慮して行動するので、結果が直ぐに出ず見えにくい。

4 ペリー提督来日前の状況

イギリスから始まった産業革命（1760～1830）により欧米列強は工業化が進展し、これに伴い商品市場と原料供給地を国外に求めるようになった。また蒸気船の発明により海外へ容易に進出することが可能となる。そこで欧米列強の船がアジア市場を求め、東南アジアから清国沿岸にも押し寄せてきたのである。

文政年間（1818～1830年）になると、わが国の沿岸にもイギリス船、アメリカ船、ロシア船などが数多く現れるようになった。

(1) 1837年（天保8年6月27日）アメリカ商船モリソン号が日本人漂流民7名の送還と通商を求めて浦賀にやってきた。浦賀奉行所は1825年（文政8）の「異国船打払令」（「無二念打払令」^{むにねん}）に基づき、警備諸藩に砲撃をさせた。

(2) 1840年（天保11）イギリスと清国の間でアヘン戦争が勃発する。

戦争は2年間継続するが、強力な軍事力を有するイギリスの前に清国は大敗する。幕府はオランダの商館長エデュアルト・フランディソン及び来航中の清国船から情報を得る。

(3) 1842年（天保13）「天保の薪水給与令」^{しんすい}を發布する。

外国の船が暴風にあい漂流して近づいてきても、打払わず食物薪水を与え

帰帆を諭す。上陸させてはならない。

(4) 1844 年 (弘化元年) オランダのフリゲート艦が長崎に来航。艦長からオランダ国王の親書が奉呈され開国を促される。幕府は「祖宗歴世の法」を変えられないと断る。

(5) 1845 年 (弘化 2) 阿部正弘老中首座となる。

諸藩に軍艦建造を許す。阿部は徹底した避戦方針を堅持しながら海防の強化を図る。このため海防組織の改編と人材育成に取り組んだ。さらに開国への道を探っていた。

5 開国への道

(1) 1846 年 (弘化 3) 米国東インド艦隊司令長官ジェイムズ・ビッドル提督率いる軍艦 2 隻が江戸湾口に現れた。渡来理由書には通商が可能か確認に来たとある。阿部老中首座は、通商は禁じられているので早く帰帆するように命ずる。ビッドル提督は了解し引き上げた。

(2) 1853 年 (嘉永 6) 6 月 3 日、米国東インド艦隊司令長官マシュー・カレブレイス・ペリーが旗艦サスケハナほか艦船 3 隻 (黒船) を引き連れ浦賀沖に来航した。日本に開国を要求する米国大統領フィルモアの親書を届けるためである。このため国内は騒然となった。

落首「泰平の 眠りをさます 蒸気船 たった四はいで 夜もねむれず」

日本側が猶予期間を要求したため、ペリーは久里浜の応接所にて親書を幕府役人に渡し引き上げた。翌年返書を受けに再び来日すると言い残して。

(3) 1854 (嘉永 7) 1 月 16 日、ペリーは旗艦ポーハタン号など艦船 7 隻 (追って 2 隻追加で計 9 隻) で再び現れ、小柴 (横浜) 沖に碇泊し国交の開始を要求。ペリーが日米和親条約の交渉場所として求めたのは幕府のある江戸に近い場所である。一方幕府は万一交渉が決裂して戦争となった時を考慮し、江戸から出来るだけ遠方にするとして、鎌倉・浦賀を提案した。妥協点として横浜村に決まる。応接地は横浜の駒形 (現横浜開港資料館) となり、2 月、浦賀奉行所組頭黒川嘉兵衛、通詞森山栄之助が艦隊を訪れペリーに面会。ペ

リーから条約の締結が受け入れられなければ、戦争になるかもしれない。当方は近海に 50 隻の軍艦を待機させており、カリフォルニアには更に 50 隻あると脅かされる。ペリーは江戸湾へ示威的な意図で侵入するなどの脅迫行為をするので、正弘はもはや「ぶらかし策」（はぐらかしながら時間稼ぎをする策）では無理と判断。溜間大名、関係者などの条約締結止む無しの声を受けて正弘は和親条約締結を決意した。

(4) 2月10日午前11時半、ペリー一行横浜村上陸。 対する幕府側は首席林大学頭（林復齋）、町奉行井戸対馬守、目付鵜飼民部小輔、儒者松崎満太郎、浦賀奉行所与力香山栄左衛門。4回の会談が行われた結果、3月3日に**日米和親条約（神奈川条約）**の調印が交わされた。老中首座阿部正弘ら6名が署名する。 条約の全文は12条。なお、第9条はアメリカへの片務的最恵国待遇事項（他国に認めたことはアメリカにも即座に認めること。）となっており不平等条約であった。

(5) ペリー来航の目的

① 2つの目的があった。

- ◎ 1つは北太平洋に展開されるアメリカの捕鯨船を保護してもらうことであつた。遭難した際の救助、^{しんすい}薪水・食料の補給を求める。捕鯨は鯨の脂肪を灯油として利用する。鯨肉は食する習慣がなく海に投棄した。
- ◎ 2は中国貿易（綿製品輸出）におけるアメリカとイギリスとの競争のため太平洋航路を開拓する。

② ペリーの本音

ペリーが海軍長官あてに書いたメモ1852年（嘉永5）

- ◎神はアメリカ合衆国に対し日本人を万国の一員にしてあげる役に指名した。
- ◎合衆国の多数の船舶、捕鯨船などの避難港を「出来れば穏便に、しかし必要とあれば武力に訴えても確保することが至上の命題である。」

③ アメリカ政府は、ペリー提督に対して「日本人から攻撃を受けても自衛のため必要な時以外は武力行使をしてはならない。」と釘をさされていた。しか

しペリーは上院報告書の中で、「目的達成のためには武力行使を怯んではならない」と述べている。

(6) 幕府の戦略 老中首座阿部正弘 「西洋諸国は交易による漸進的浸透^{ぜんしんてき}か戦争の挑発か、いずれにせよ日本を侵略しようと狙っている。このため、当面は避戦政策を表にたて、海防の整ったあとで、鎖国・打払いを実行したい。」

(7) 1854年(嘉永7)に掘利熙^{としひろ}(岩瀬の従兄弟)、永井尚志^{なおゆき}と共に忠震も目付に昇進する。1855年(安政2)堀田正睦^{まさよし}は老中首座になり、忠震は正睦の側近として外国との交渉などに活躍する。

6 横浜港開港への道

1856年(安政3)7月アメリカの総領事としてタウンゼント・ハリスが赴任して下田郊外の玉泉寺を総領事館と定めた。ハリスの第1の使命は、通商条約を結ぶことであった。大統領のピアースから託された将軍あての親書を再三江戸へ出府し将軍に会うことを申し出るも拒否される。

1857年(安政4)6月17日、阿部正弘逝去(享年39歳)。

正睦から忠震は下田奉行井上清直と共に日米修好通商条約の交渉を委任される。忠震は積極的に開国すべしとの考えであった。ハリスと丁々発止の交渉を行い、条約締結前までに至る。

ハリスは他国の圧力を利用。アメリカの「友好政策」というもの。

ところが条約締結の勅許を受けられず、承認を得るため正睦は川路聖謨^{としあきら}と忠震を伴い朝廷に出向いたが失敗する。

1858年(安政5)4月23日、井伊直弼が大老に就任。日米修好通商条約調印について直弼は延期を主張するが、万一の場合は調印しても良いとの言葉を得て6月19日、強引に岩瀬・井上とハリスがポーハタン号上で日米修好通商条約に調印する。不平等条約である(①領事裁判権 ②関税自主権の放棄 ③片務的最恵国待遇)。

6月23日、正睦と松平忠固は老中罷免となる。

6月25日、紀州慶福（徳川家茂）が将軍に決定。

6月26日、直弼は老中間部詮勝と所司代酒井忠義に朝廷で条約調印の弁明にあたるよう命じる。

9月5日、忠震は作事奉行へ左遷された。

1859年（安政6）6月2日 横浜開港

そして同年8月27日、御役御免・居宅籠居となる。屋敷に閉じ込められ外出は一切禁止。直弼の腹心宇津木六之丞の機密文書（公用方秘録）には、忠震について「邪智奸佞の者一印の徒にこれあり」と記されていた。1861年（文久元）7月11日、忠震亡くなる。44歳。憤死ともネズミのサルモネラ中毒死とも言われる。

7 安政の大獄

1 違勅（無勅）問題 — 日米修好通商条約の勅許が得られない。

2 将軍継嗣問題 — 13代家定は病弱で嗣子がない。このため跡継ぎ候補として紀州藩主徳川慶福（家茂）と水戸徳川斉昭の子一橋家主の慶喜が推されていた。前者を支持するものは南紀派といわれ、井伊直弼、譜代大名、大奥などである。一方、後者を支持するものは一橋派で、越前藩主松平慶永（春嶽）、薩摩藩

主島津斉彬らの有力大名及び幕府官僚の岩瀬忠震、永井尚志、水野忠徳らである。1859年（安政5年）6月23日、井伊は老中堀田と松平忠固を罷免する。その後の老中を自派の太田資始、間部詮勝、松平乗全で固めた。

同年7月5日、押し掛け登城の罪で尾張、越前藩主に謹慎・隠居、水戸藩主と慶喜が登城禁止、斉彬が謹慎となる。7月6日将軍家定死去。紀州慶福が将軍になり家茂となる。

一方、京では尊王攘夷派の志士や公家が巻き返しを図り、その結果8月8日、

条約無勅調印と御三家に対する処罰を咎め朝廷から水戸藩へ密勅が出された。これを知った幕府は、幕府権力への挑戦と捉え大弾圧を展開したのである。

処罰者 死刑・獄死（吉田松陰・橋本左内など9名）、隠居・謹慎（9名）永蟄居（3名）、遠島（2名）逮捕前死亡（2名）、公家の処分（6名）など100名を超えた。

8 桜田門外の変

1860年（安政7）3月3日、大雪の中、江戸城参上の桜田門外において水戸浪士17人と薩摩藩士1名が襲撃。首を切られた。享年46歳。襲撃予告は当日の朝も封書が投げ込まれていた。何故、臨戦態勢を取らなかったのか。

9 横浜開港

井伊大老は旧体制の鎖国に拘り、外国との通商は出来るだけ制限をすることを考えた。このため開港場は東海道からはなれた横浜に設置を主張。一方ハリスは神奈川湊を主張し意見がまとまらなかった。幕府は横浜開港上を前提として開港期日までに横浜の街造りを完成。アメリカ公使ハリスやイギリス総領事オールコックは反対した。止む無く神奈川湊に決定となる。ところが外国商人が地形の優れた横浜に会場を求め、ハリスやオールコックも反対を撤回することとなった。

10 開国・横浜港開国功労者の評価

(1) 「開港功労者顕彰」でテーマに該当する6名のうちT・ハリス（開港を導いた外交官）及びM・ペリー（神奈川条約で横浜開港を主張）は以下の理由から功労者に該当しない。

①彼らの来日は、自国の利益のためであり、わが国の為ではない。② わが国との交渉では砲艦外交を一部展開している。③ 不平等条約を押し付けた。

(2) 佐久間象山は、確かに私塾で塾生に開国・横浜開港を教授するなどした。しかし、開国・横浜開港時の幕閣構成員でもなければ、外交担当者でもない。また、それらの人々に影響を及ぼしたことの裏付けもない。よって功労者とまでは言えない。

(2) 問題は井伊直弼である。日米修好通商条約調印時の大老であり、調印に

ついて延期を主張するが、万一の場合は調印しても良いと岩瀬・井上に述べた。従って消極的であるが開国の功労者とも考えられる。しかし、私は認めたくない。それは、以下の2点からである。① 間部老中が朝廷へ提出した文書には「条役調印は正睦が幕府役員に命じて行ったものである。」と記載されていた。これは事実と異なるが、直弼の本心であろう。② 九条閑白への手紙に直弼はこのような記述している。「どうしてもハリスが了解しなければ、その時は調印も止むなしとは言った。しかし私の本心はあくまで条約調印の延期であった。そのことを忠震は忖度すべきであった。」

◎ 開国の功労者

1位 岩瀬忠震 2位 堀田正睦老中首座、海防掛目付の面々（堀利熙^{としひろ}、永井尚志^{なおゆき}、大久保忠寛^{ただひろ}など）、下田奉行井上清直 3位 阿部正弘老中首座（間接）

◎ 横浜開港の功労者

1位 欧米の商人たち 2位 井伊直弼 3位 上記開国の功労者（間接）

1.1 横浜市への要望

開国と横浜開港の功労者が誰か分からなくなるのは、横浜市の過去から現在までの銅像・石碑設置のあり方に原因がある。

そこで、横浜市に対し次のように要望するものである。

- 1 昭和33年6月、横浜開港100年記念事業の1つとして「開港功労者顕彰」にあげた岩瀬忠震と堀田正睦老中首座の石碑又は説明版を横浜市有地内に設

けて欲しい。

- 2 掃部山の井伊直弼銅像の説明版内容に追記をして頂きたい。それは岩瀬、堀田の活躍および安政の大獄と桜田門外の変についてである。